「総合」は、ほんとうに辛い――ですか？

―わたしにとって「総合活動型日本語教育」とは何か―

キム・ヨンナム

【キーワード】総合活動型・楽しい習得・考えの深さ・自分のことば・喜び

1. はじめに

「日本語教育実践研究(9)」では、細川先生が設計・担当されている「総合活動型日本語教育（以下、総合）」に参加している実習生により、総合クラス活動においての実践研究が行われる。実習生は、総合のクラスで日本語学習者の活動をサポートする傍ら、このクラスが実習生各自にとってどういうものかをレポートとしてまとめるようになっている。本レポートは、課題に従い、まず「わたしにとって総合活動型日本語教育とは何か」を動機文として作成した。それから、自分が抱えている問題意識を持って、現在総合に関わっている人と対話する時間を持った。以下の内容は、大きく「動機→対話→結論」と構成されていて、最終的に「わたしにとって総合活動型日本語教育とは何か」と、その答えを見出そうと試みている。

2. 動機　―　楽しく習得したい

いわゆる「外国語学習」というと、誰がどれくらい辛抱強く単語を暗記し、表現を自然にこなすかによるのだと信じ込んでいた。外国語の上達は知能指数と関係なく、根気と忍耐力で勝負するものだと言われてきたし、なぜ勉強するのかはまったく問われず、どれくらいのスキールを身につけたかばかりをしきりにテストされてきた。それで、私にとって第二言語でのコミュニケーションは、暗記と練習の繰り返しによって可能なものという印象が強かったし、実際もその過程の中で日本語を学習してきたのである。このような形態の第二言語学習には、かなりの我慢強さが求められる。将来、遭遇するかも知れない場面を想定して、表現を機械的かつ辛抱づよく暗記、練習しない者は第二言語でのコミュニケーションなど諦めないといけないと、思っていた。

しかし、第二言語を習得する唯一の方法として固く信じてきたこのようなやり方を、その根本から覆すきっかけになったのは、今年の4月から学習者として経験した「総合活動型の日本語教室」である。新しく提示される単語も、日本語らしい表現や正しい文法もこの教室には存在しなかった。ただ、各自が言いたいことを日本語で表現し、一緒に参加したみんなの共感を得ればそれでよし。この教室ではじめて、私は自らの必要によって単語や表現を調べたし、異なる形の言い方を自分なりに考えたのである。

「総合」の教室で発する表現や書いた文章などは、かけがえのない「自分の言葉」という点で、意図的に行った従来の言語学習とは比べ物にならない。

ところが、機械的な暗記学習と同様で、「総合活動型の日本語教室」においての「学習」も決して楽しいものにはならなかった。自分の立場を説明し、それを人に理解してもらうため、今度は学習者全員が時間をかけて考え、悩まないといけなかったのである。その上、この「考える」過程は予想だにしなかったつらい時間であった。「総合」クラスにおいても、やはり時間と根気、忍耐力は必要だった。当時、私と一緒に「総合」クラスを終えた多くのクラスメートは、各自の感想を述べる授業の最終日に「とても勉強になった」とうなずきながらも、「二度とやりたくはない」と言っていた。「総合」クラスでの活動が、日本語習得に役立っていると認めているにも関わらず、一度味わったその「考えることの辛さ」をほとんどの人が二度と繰り返そうとしなかったのである。

いくら効果的な活動であっても、学習者の参加が単発にとどまると言語を学習する意味がなくなってしまうのではないか。第二言語の習得において「はじめ」はあっても「おわり」は考えられない。だから、「総合」クラスに学習者が重い負担を感じてしまうと、また機械的だった元の暗記学習に戻っていく可能性が高くなると思った。

「総合」クラスは言語の習得以前に、考える行為を通じた自我の確立やコミュニケーション能力の育成という面においてもとても大きな意味があると思う。このような「総合」の強みを生かし、学習者の「思考の負担」は軽くした、楽しむ「総合」とは考えられないのか。思考を一気に搾り出さず、少しずつ持続させたい。私にとって総合活動型日本語教育は、楽しく自発的に学習を続けるきっかけを付与することである。

3. 対話（I）

私が経験した「総合」は、かなり「つらい」ものだった。不思議なことにクラス活動を面白いと思いながらも「つらさ」を感じていた。動機文で私は「考えることがつらい」と述べているが、それはどうしてなのか。それに、この「つらさ」はどうにか軽減できないものなのか。その答えを探るべく、私は武さんに対話を申し込んだ。

3－1. 対話相手の武さん

武さんは早稲田大学の日本語教育研究科、「言語文化教育研究室」の2期生で、総合クラスに関しては学習者と担当者の両立場をすでに経験している。彼女に初めて出会ったのは2004年4月で、当時、私は大学院入試を準備していた。将来韓国に帰り、自分が今まで習得ばかりしてきた日本語という言語を、これから学ぼうとするすべての人々のために使おうと思い始め、NPO法人「言語文化教育研究所」の「日本語教師のための言語文化教育入門講座」に参加した。ここで、私に教師としてのあり方や心構えを深く考えさせてくれた方が武さんである。「総合」をよく知っている彼女こそ、「楽しい習得とは何か」を話し合うにとても適合な人だと思い、対話をお願いした。

3－2. 総合に関する2つの思い

3-2-1. ラクに学ぶ楽しみ vs. 学んで使える楽しみ

どうせ第二言語を学ぶなら楽しく習得したいという気持ちは昔からあったが、一概に「楽しく」といっても、人の思う「楽しい習得」がすべて一致するわけにはいかないようだ。武さんの「楽しい習得」は、私の考えと根っこから違っていた。

（対話1回目）2004年10月25日　17：00～18：00　早稲田大学　22号館　第二自習室

（W：わたし、T：武さん）

W：　じゃ、武さんの思う「楽しい習得」とは、どんなものですか。

T：　うむ。私？私の「楽しい習得」は「苦しい習得」かもしれない(笑)けれども、とにかく自分の頭とか心が動いていることね。うん。

W：　でも、それを学習者が楽しいと思うんじゃなくて、苦しいと思っているんですね。

T：　うん…。だけど、勉強における楽しさというのは、苦しさと表裏一体。それこそ、単語を覚えていて、100コ覚えるのは苦しいけれども、覚えた時は楽しい。あぁ、よかった、やったぞ、と思うのは楽しいでしょう。そういう…

W：　満足の形？

T：　うん、満足の楽しい。そういうもので、決してゲームなんかしたりする、ラクなことではないと私は思う。

W：　でも、子供が言語を覚えるときは…

T：　子供は別！

私の、まるで言い訳のような子供の言語習得形態について、それは別の話！と、武さんはきっぱり言った。そして、言われた私自身も「うん…、でも…」など、もごもごと抗弁しながらも、実は心の中では武さんの断言を認めていた。単語を覚えたり、文法や表現にいちいち気を使ったりするのは本当に大変なことだ。子供のように騒ぎ立てて遊んでいるうちいつの間にか外国語が話せたら苦労を覚えずに済むだろうと期待するのは、私だけではないと思う。しかし、大人は子供時代には戻れない。一社会人として、様々な人間関係が複雑に絡み合っている日常のなかで、「子供のように」といつまでも遊び感覚になっては言語を習得することが難しくなる。大人は新しい言語を習得する際、すでにその言語を使う場面においての人との関係、それに利害関係までも考慮するからだ。私が望んだ「楽しい授業」というものが、ほかの学習者や目標言語の母語話者とわいわいしゃべりながら自然に言語を身につけていくという、「ラクに学ぶ」クラスだったのか。武さんの、子供は別！というあまりにもきっぱりした言い方振りに私はがっくりしながらも、大人になってしまってから言語を学びはじめるという現実は認めざるを得なかった。

しかし、そうはいえども、苦しい習得が結局楽しいものにつながるということは、どうも賛同できない。言語を覚えて自在に使えるのは楽しいことだけど、そこまで至

る過程が苦しくて、途中あきらめる人も多いからだ。言語を身につけて達成感を覚える前に、つらい習得過程という高い壁に遮られている。辛抱強く耐えてその壁を乗り越えないと、言語を習得した後の楽しみは得ることができない。だから、できれば楽しく習得したいのだ。

3-2-2.「考え」の深さ

総合が苦しい理由は、今まで考えたこともないのにその答えを出すようにと、しつこく求められるからだ。「私は A さんが好きです」「それはどうしてですか」「え？それは、なんとなく…」。総合では、この「なんとなく…」をはっきりした言葉に変えて人に納得してもらう時まで問いつづけられる。母語で説明しろと言われてもできそうもないものを日本語であれこれやりくりして言葉をつなげていると、そのもどかしさに心が焼く。この思考へのプレッシャーをなんとか軽くさせると、総合クラスも今より楽しめるかも知れないと私は思っていた。

W： 疑問があるときはもちろん「なぜですか」と聞けるんですけど、総合ではもう自分もわからないところまで掘り下げるんですね。学習者が答えられないところを結局答えさせようと、「考えさせる」のです。例えば、私の場合、母語で話すとき、ただ「○○が好きだ」とは言っても、「なぜ」まではあまり考えないです。でも、今の総合では、「なぜ」が聞かれて、またそこから考えるんですね。

T： うん…、でも、それをしないと総合じゃないと思う。

W： 私の「考える」…この部分で「考える」ことの意味が違うんですが、単語がわからないとき、ほかの表現を考えて、そのコミュニケーションをつなげること。

T： でも、そうしたら頭が全然動かないじゃない？それは、表現に関して動いているだけでしょう。

W： （私は）それも考えることだと思ったんですけど。

T： あー。それは、考えることとはまた違うかな…。考える…「深さ」が違う。

W： でも、私が思う、今の総合の一番つらいところが「なぜ」で、それが自分のレベルで答える「なぜ」だったらいい。

T： だから、それは自分で考えていないことじゃない。

W： でも、学習者がつらいつらいと思いながら、自分の母語でも言えないのを総合でしゃべるのは、もう授業を登録してしまったし、成績をもらわないといけないから頑張っていると思うんです。総合が終わってしまったら…。

T： うん、そうか…、うん…。

W： で、その場を離れたら「もういい」ことになってしまう、それを私はもったいないと思っているんですね。でも、「考え」が浅くても、それが持続的にずっと考える形になったほうが…。

T： でも、それは、私は「考える」こととは思わないよね。

W： 武さんの「考える」のは、やっぱり総合で深いところまで、突き詰めることが「考える」ことなんですか？

T： うん。そう、だから表現を考える、言い方を考える、入れ替えてみたり（言葉を）足してみたりす

るのは、「考える」ことではなくて、なんだろう、「考える」という言葉を使うけれども、本当の意味での考えることとは違う。

W：　でも、母語でもそんなに考えているわけではないんで…。

T：　うん、でも、それは母語と第二言語とで分けるものじゃなくて…、だから、可能性としてはね、母語では考えていなかったけれども、でも日本語で考えることができるようになったら、母語でもそのようになる、ということが教師冥利に尽きる…と思わない？

「楽しい」という言葉と同様、「考える」ことにも武さんは私と異なる意見を持っていた。日本語でコミュニケーションできるように表現や言い方を工夫することと、今まで考えたこともなかったことの答えを探る、という二つの「考え」。それに、「総合クラス」においては後者のほうが本当の意味での「考える」ことだと武さんは言う。しかし、その考えることがあまりにも大変で、総合を楽しいとは思わないのだ。

対話がここまで至っても「楽しい授業」とはどういうものか、まったくつかめられなかった。私は、自分が何か難しいことを望んでいるとは思わない。ただ学習者が「総合」を「楽しい日本語習得の場」と感じてほしいだけである。あれこれ自分の力で考えて、日本語で表現して、それを人にわかってもらう楽しみを「総合」で学習者が満喫し、また「総合」を、いや「考える」ことを続けようと思わせるクラスを彼らに与えたい。そのためには、やはり身も心も持たないほどの過重なプレッシャーがかかってはいけない。しかし、思考への負担を減らしてあげるつもりで、学習者の奥深いところにある言葉には触れようともせず、表現や言い方を工夫する表ナメのような「考え」は、正直私も、「総合」にはならないと思った。

3－3.「総合」は日本語教授法ではない

W：　卒業したら、私も多分日本語の先生になろうとするだろうと思うんですけど、そうするとやっぱり…今の「総合」をやることになるのではないかと…、ま、自分が習ったのがこれなんで。

T：　だけども、私の考えはね、それは方法じゃなくて、考え方に過ぎないから、あれをそのまま持ってってやることはできないと思うね。

W：　うん…。

T：　だから、ヨンナムさんはこの「楽しく習得したい」と思っているよね。考え方は持っていて、形は違うものになると思う。だけど、浅く、形だけを考えることにすると、それは考え方も全然違うものになっちゃうから、根っこが違うものになるんじゃないかなというのが私の…考え。

W：　私は国で「総合」の形で日本語を学習したことがなかったんですけど、今帰ってもこのような形態は多分ないと思うんです。何を心配するかというと、このようなクラスを私が作って学習者を呼んだとき、一回やってから、「あ、もういい」と（学習者が）以前の学習スタイルにもどるのでは…。

T：　なんか、根本的に違うのでは、私は…、ちょっと待ってね。

W：　何かがズレてるんですか。

T：　うん…ズレてる、ズレてる。だから、それを持っていってするということ自体が違うんだと思う。

形を持っていってするんじゃなくて、考え方だから。形を持っていってするんだったらば、それは本当に一回でさようならになるけれども、今の総合は考え方を学んでいるだけだから、それをそのまま持っていくのはあり得ない。

W：　というのは…？

T：　言語学習におけるひとつの考え方。その考え方の一つの表し方が「総合」であって、それが実現できないならばできないわけよね、私たちは。

初回目の対話はここで終わっていた。武さんは、「総合」が方法ではなく「考え方の一つ」であることを指摘してくれたが、当時、私はそのことにあまり気がつかなかった。私は、自分が学習者のとき体験できなかった「総合」というスタイルにひたすら惹きつけられていたし、私自身も将来いつかは「総合」のようなクラスを担当することになるだろうと信じて疑わなかった。そこで、どうにか思考の負担を軽くした「楽しく思える総合」とはできないのかという思いつきにまで至ったのである。しかし、思考を徹底にしないと「総合」とは言えないと、武さんは一貫して意見を述べていた。

この時、私は結論が書けなかった。「総合」を教える方法のひとつだとばかり思っていた私は、将来つらいままの今の「総合」を学習者に強いるか、それともこのスタイルを諦めるか、どちらかを決めないといけないと思ってしまったし、それが恐らく本レポートの結論につながるだろうと推測していた。しかし、どっちとも決められなかった私は、取りあえずここまでの対話記録をクラスで報告してみることにした。

4. クラス報告　ー　〇〇流「総合」

（対話報告）2004年11月10日　14：40～16：10　早稲田大学　14号館　810号室

（H：細川先生、W：わたし）

H：　どっちを選ぶかという…どっちは何と何なんだ？

W：　だから、今の総合をするか、それとも違う形をとるかといった…

H：　それはおかしいんで、ここでいくらそれを書いたからといって、僕と同じ授業はできないんです。総合ができるのは、世界中、僕しかいないんだから。

W：　なんか、だから、ここで習っているから。

H：　いやー、そうだけど、別に同じことをやりなさいとは僕は一言も言ってないし、できるはずがないと思っているんです。でも、だからそれは何なんだということを考えていかないと。それが、武さんが言っている考え方？形と考え方の、うん…多分そこになんかあるんだろう。武さんは武さん流の総合をやっているわけですから、ま、だから、それを彼女がどう考えているか、それをもうちょっと切り込んで聞く必要性はある。

まとめた対話の内容を報告するクラスで、細川先生にまた同じようなことを指摘された。同じ「総合」なんかできるはずがない。同一人物がやっても「総合」クラスは毎回違う。「総合」というスタイルのクラスであっても担当する者によって、またそのときの学習者によって当該「総合」は異なる色を放つのである。

「武さん流の総合があるはず」という先生のコメントにはじめて、私は自分が何か大きく勘違いしていることに気がついた。武さんには武さん流の「総合」があるはず。それはどういうものなのか。「総合」を続けるかやめるか決められないまま行った対話報告で、思いがけない方向性を見つけた私は、この意外な展開に期待を抱いた。ひょっとしたら「総合」を諦めなくてもいいかも。私は再び武さんに対話の願いをした。

5. 対話（II）

（対話2回目）2004年11月24日　17：00～18：200　早稲田大学　22号館　第二自習室

5－1. 武さんの「総合」を聞かせてください！

クラスでの報告内容をメールで武さんに知らせた私は、2度目の対話願いと共に、今度の対話では武さんの「総合」とは何かを聞かせてほしいという旨をも伝えた。しかし、その質問はかなり武さんを困らせたようで、彼女は「私の総合って何だろう…。」と繰り返すばかりだった。2度目の対話の日も、武さんはやはり困った表情を隠せなかった。

W:　…と言うことで、武さんはどんな総合を持っているのかが聞きたくなったのですね。

T:　はぁ、それは私もまだ、はっきりわからない。

W:　でも、やっぱり武さんのほうも細川先生と同じ総合をやっているとは思わないんですよね。何が違うんですか？

T：　何が違うんだろう…。ということよりも、根本の考え方は多分すごく賛同しているけれども、その考え方をどう教室で具体化するかというところが変わってくるので、何が違うとかとは…。で、ヨンナムさんが言っているのは、考え方の点で何が違うのかっていうこと？

W:　考え方でもいいし、細川先生の総合というか、その理念に賛同しているとしてもまったく先生と同じ総合が実現できるはずはないと言われました。

T：　うん、うん。

W：　だとすると、先生の総合と武さんの総合はどこら辺が、微妙でも異なっているのかと。

T：　うん…。どこが異なっているんだろう…。私は、うん…、形？うん…。細川先生は、「掘り起こす、掘り起こす」でしょ？で、私は、もうちょっと掘り起こしつつ、なんだろうな…、掘り起こしつつ、もう少しサポートしていく、表現のサポートをしていく必要がある。

W：　表現のサポートというのは、もっと表現を磨くという意味としての？

T：　だから、その人らしい…、その人が言いたいことが伝わるだけじゃなくて、もうちょっと、なんというのかな…、あのう…、いろんな表現をしたいって思っているはずだと思うのね。伝わるだけじゃなくて、文というのはその人を表すものだから、その人らしいものに、

W：　でも、その人らしい…ものを、教師がどうやってサポートしますか？

T：　あ、サポート？　その人らしいものが出てくるように、なんというかな、いろんな語彙のバリエーションとか、文型のバリエーションなんかをある意味、つけながら、で、そこから学習者がピックアップしていくようなことが必要じゃないかなっていうふうに…。

W: ああ…。

「武さんの総合はどういうものですか？」この質問に武さんはかなり困惑したようだった。何か違うところがあるいうことは認識していても、それが何なのかよく分からないまま、武さんはなんとか私に説明しようと一生懸命努めていた。しかし、「表現をサポートする総合」というのはあまりにも大まかな言い方で、聞いてもさっぱりわからない。おそらく、武さんは自分の総合がどういうものか、以前説明したことがなかったと思う。心の中では、確かにその違いを感じ取っていても、ことばとして表したことはなかっただろう。

ところが、この曖昧だった武さん流の総合の定義は、対話が深まるにつれ、だんだんその姿が鮮明に現れてきた。霞がかかっているようにぼんやりしていた武さん自らにとっての「総合」を、対話の真っ最中に、ついはっきりしたことばをもって明瞭に語ってくれた。

T: 私の中の総合は「出す・出す・出す」だけじゃなくて、もう「入れて、出す」、インプットだね。でも、そのインプットは何のためかというと、「出す」ためのインプット。

つまり武さんは、学習者が内面に持っているものを言語の形で外側に引っ張り出すことだけの総合は物足りないと思っていた。学習者がいろんな表現を使い自分を剥き出せるようにするには、やはり語彙なり文型なりが外側から与えられないといけないと思っていたし、しかもそのようなインプットというものは、教室担当者だけでなくクラスメンバー全員から行われるべきだと強く確信していた。

私は、武さんが自らの総合を見つけ出す場面を見ながら、「総合」の本当の意義を身をもって経験する気分になった。自分が「なんとなく」感じていたことをことばの形にして、人に納得してもらうこと。その過程を武さんが見せてくれたのである。自分のことばで、自分の思っていたことを語ることこそが「総合」をする本当の意味であるだろうし、だからこそ、その「考えること」を怠っていては「総合」と呼べなくなるのである。

こうやって「武流の総合」とは何か、ついに決着をつけた武さんは、以来、対話が終わるまで、まるで反芻するように何度も繰り返し自分にとっての「総合」を強調し、再確認していた。それに伴い私は、つらく思われても「考える」ことをあきらめてはいけないと思うようになった。

5－2.「考えること」はつらい？それとも楽しい？

W: 総合で「考える」ことははしかに…、納得しました。そこまで考えないと総合にはならないと私も思う…。ただ、これからもし、私が「総合」をする場合は、どのように他の周辺環境を軽くして、楽しい雰囲気を作るか、しかない（と思う）…。ほかの周辺雰囲気を工夫して、クラスが面白かったり、楽しかったりすることで、考えることがつらいとしても、そうすることによって…。

T: それが「軽減」できれば、ということでしょう？

W:　ええ、そのほかの楽しみがあるからまた来る形にする。だから先生*がものすごく面白いか、ほかのなんか…、いつも「おいしい」何かがあって、来るようにするしかないですね。やっぱり考えないと「総合」にならないというのは、改めて認識しました。だから、つらく思わせないように、雰囲気をもっと楽しくする！それで、周辺環境を楽しくすることで、考えるのがつらくても、ほかの何かの魅力があるから続けてこられる「総合」を…。

T:　うん…、でも、考えるのがつらいけど、楽しいと思えなければ…。

「総合」は「考えること」であると認めても、やはり武さんと私とは、ここが違っていた。私に、考えることのつらさは、避けて通れないものである。だから、考えること以外の過程を非常に楽しくすることで学習者の総合活動を続けさせたらといったのは、対話中の思いつきだった。しかし、武さんは、自分の中に潜りこみ、答えを見つけるまであの暗闇を浮遊し続けることを「楽しい」と思わなければいけないという。

T:　私はつらい作業が楽しいものだと思うのが一番いいと思うんだけれども、そこに思えるところまでには、いろんな要素がないと続けていけないと思っているのね。だから、その間に、例えば、あのう、ことわざをやってみたりとか、ということはしているよね。ヨコ総合でも。

W:　ええ。

T:　うん、擬音擬態語をやってみたりとか、それで、やっぱり総合をやっていると渇望感が出てくる。自分の中を出してばかりいる。出して、出して、出して、何も入ってこないと、渇望感がすごく出てくるから、今入れているっていう意識もないといけない…と思うのね。だから、その辺をごまかしながらやっている。うん、だから、それが、ヨンナムさんが言っている「楽しい」の意味だったら、それはヨコ総合ではやっている。そういう意味では。

W:　それが…。武さんの総合でしょうかね…。

T:　あぁ、そうかもしれない。だから、私もごまかしつつやっていくということはしているけど、最終的には、そのごまかしつつ連れて行きながら、自分がこのつらい活動が楽しんだということを目指している。

武さん流の総合は、「入れて出す」インプットを念頭に置いた形のものであって、彼女は「考える」行為を学習者に楽しく思わせるようなクラス活動を目標としている。今回の対話で「総合」に対する武さん固有の考え方や、教師としての固い信念などを見つけ出せたようでうれしかったものの、「考えること」＝「楽しい」ことという公式にはなかなか納得がいかなかった。つらい思考を楽しい活動に変身させること？私にはまるで、夢のような話だった。そんなこと、ただ理想に過ぎないのではないか。私の中に「考えること」＝「つらいこと」という認識が、長い間、あまりにも頑固に根付いていたからかもしれない。それで、まさかこの対話で武さんとの一致点を見つけ出すところまで至るとは、思いもしなかった。

---

* クラス担当者のこと。

5－3．あっ、一致した。

自分が言いたいことは何か？それをことばにするのは簡単でありそうで、実はとても難しいことである。一言で表そうとしてもなんだかすっきりしない、または表現が不適切な感じがするとき、その原因はどこにあるのか。自分のことばや表現が不足しているからだとは思わない。「総合」ではよく「自分をくぐらせる」という用語を用いるが、これは深く、丁寧に考えを重ねて、本当に言おうとしているものを「自ら見つけ出す」ということを意味する。それに、このような「自分のことばの発見」は他者との対話、つまりインターアクションによってだんだん明確になるのではないかと思う。私の場合、武さんとの対話を繰り返す中で、自分が本当に思っていたのは何だったのかを見つけ出すことができた。

私はこの対話を始めるずっと前から、考えることはつらいことだと強く思っていて、それをなくすためにはどうすればいいのかばかりを今まで悩んできた。ところが、私にとっても思考を深めることがいつも 100 パーセント「つらい」行為ではないことをこの対話の中で気づくのである。

W: そういえば、今ふと思ったんですが、私はこのような活動の経験がもう 3-4 回くらいになるんですね。もう、そんなにつらいとは思わなくなりました、正直に言うと。最初は今も忘れられないぐらい大変だったんですけど、今は、私は、それを楽しんでいるかもしれない。その…考えるつらさ…。

T: いま？あ、そうなんだ。

W: うん、多分…慣れたからだと思うんです。深く考えることに慣れてない人を考えさせると最初はものすごくつらい…ですけど、何回も何回もそのくらいのレベルまでは考える、その境地（笑）になっていると、そこまで（深く）考えてもそんなにつらくはないと思うし、むしろ自分の言いたかったのを相手に「うんうん」となずいてもらったら、多分それが楽しいと思う。それが、いま武さんがおっしゃる「考えることのつらさが、反面楽しさに変わること」じゃないかと…、自分が考えて言語化できないことを…

T: ここで共に言語化しましょう！ あぁ。

W: そうですね。すごく魅力的だと思います。だから、（学習者が）<u>それを魅力的だと思ったら考えることをつらいと思わない。</u>

T: そうかそうか。その喜びなのよね、結局。ここで私が…、そうだそうだ。はい、一致します。はい。だから、自分が考えていたけれども言語化できなかったものが言語化できるようになる。

W: それで、それを言ってみんなが「はぁ」といったら、

T: 喜び、喜び！

W: もうそれ以上ないですね。結局目標は、自分がいえなかったことが言える喜びを与えること。そうするためにはどうすればいいかを考えるべきすね。

T: というか、言語化できなかった自分の考え方を言語化して人に理解してもらえる。自分が理解されたて思う喜びかな。どう？

W:　そうですね。それに加え、自分から説明しようと積極的に取り組むか、説明する気がないのに「どうして？」と答えを強いられるかというところが多分違う。一回でも経験したら、自分でわかると思います。

「はい、一致します。」武さんは、こう言いながら、両手を挙げた。やっと終着駅にたどり着いたという安堵と、まちまちだった意見がついひとつにまとまったという喜悦のようなものが彼女の顔に浮かび上がっていた。しかし、このとき私は、あまりにも自分の考えの整理に没頭していて、だしぬけな出来事にぽかんとした顔をしていただろうと思う。

私は、学習者に何回も総合に参加してもらいたいと思っていた。それは「総合」が既存の暗記学習より効果的な日本語学習方法だからではない。ここで学習者はそれぞれの日本語で自分を語り合い、互いに理解し合うという活動を通じて、結局他者と心がつながるという喜びが味わえるからである。その過程の中で人に納得してもらうため、一生懸命日本語での自分のことばを探ることは、楽しいことに他ならないと思う。

人間は誰もが自分の意見が他者に受け入れられたり、気持ちを理解してもらったりするとうれしくなると思う。しかし、ことばで表すのが難しいからといって表現する行為を怠ると、高く囲われた自分の城から出られないまま独りぼっちになるのではないか。他者と心を共有するためには、まず自分を語りだすことからはじめないといけないし、またそのためには、深く「考え」ないといけない。

人に伝わる私のことばを見つけるために「考える」ことは、本当に「つらい」ことなのか。今はむしろ、単語や表現を変えるくらいの言い回しだけを求めるクラスでこそ、そのもどかしさが次第につらさに変わっていくだろうと思う。学習者一人ひとりの思いや気持ちが他者の心の奥へまで届くようなことばが生み出される「総合」クラスを目指したい。その自分のことばを探している一瞬一瞬を、学習者はきっと「楽しく」感じると思う。私は、学習者誰もがはじめて参加する「総合」クラスでこのような「楽しみ」「喜び」を実感し、日本語習得のひとつの形として、ずっと「総合」と付き合っていくことを願ってやまない。将来、私流の「総合」がどのような形で現れるか、今は想像できないが、この気持ちさえ持ち続ければ、きっと大丈夫だろうと思う。

6.　結論

「総合」にはじめて出会った今年の4月、私の中には2つの違う思いが交差していた。ひとつは、はじめて接する風変わりなクラスに対する「関心」であって、もうひとつは、将来日本語教師としてこのやり方だけを一生続けることになるのかといった「つまらなさ」であった。動機→対話→結論を書くという活動はどうも単調にみえて、クラスに参加した初日から「ほかのやり方は考えられないか」と一人で工夫し始めたのである。

この時からすでに私は「総合」は教え方、つまり教授法だと思い込みはじめていた

と思う。それに実際参加したその毎週の活動の中には、平凡に見えながらもかなりの苦労が潜まれていることに徐々に気がつく。それは、私自身の考えがいやになるほどしつこく問われるということにあった。自分もわからない、それに説明したこともないのに、クラスメート達は疑問に満ちた顔でしきりに「なぜ？」と聞き続けてくる。今までクラスという場での日本語のやり取りはいつも表面的だったから、私の中にある本物のことばを取り出すために「考える」ことは、正直につらかった。それで、思考活動を軽くすれば気楽で楽しめる「総合」もあり得るのではないかと、またもや工夫し始めたのである。

これらの工夫の根本的な問題は、「総合」はやり方だという私の錯覚にある。「総合」が教授法だと思い込んでしまうと、何を試みても本当の「総合」とはかけ離れたものになる可能性が多い。武さんの指摘どおり「総合」は、言語学習におけるひとつの考え方に基づいたクラスの表し方である。だから、私が求めたい「総合」はその理念から出発するべきであった。いま目に見える「総合」を何とかやりくりして自分の都合のいい方向に向かせようとしていたから、武さんとの対話も水と油がいっしょになったように長い時間、互いの意見が空回りしていたのである。

「日本語教育実践研究(9)」を受講したからであるが、「私にとっての総合」というレポートを書くことになって、本当によかったと思う。このホッとする気持ちは、動機を書く段階からなりはじめ、対話をしていたときも、それに今のこの瞬間も変わらない。もしこのように、私にとっての「総合」の意味が問われなかったら、恐らく私は「ちょっと違うスタイルの総合」というやり方ばかりを永遠に模索していたのではないか。「私の総合」というレポートを書くことになったおかげで、それにその対話相手が武さんであったため、いま思う私の「総合」は、前とは違うものになっている。もちろん「楽しい総合」にしたい気持ちは変わっていない。しかし、学習者に楽しいクラスを与えるため、「考える」ことを軽くさせることも、それ以外の環境を面白くして学習者をごまかすことも今は考えていない。学習者自らが他者の理解を得るため積極的に自分のことばを探るということこそが、この「総合」クラスにおいての「楽しい」ことであるからだ。将来私の「総合」に参加する学習者たちは、はじめての活動からこの楽しさを味わってほしい。それで、日本語でコミュニケーションしたいからといって単語や文型ばかりを我慢強く覚えるのではなく、ずっと私といっしょに自分のことばを探し出す活動を続けてほしい。

武さんは、本当に私の好きな大先輩であるが、2 回にもわたってしまった今回の対話を通じて以前にもまして尊敬するようになった。幸運にもこんな方と対話をする時間を持つことができ、とてもうれしく思っている。最後に、このレポートを作成するチャンスを与えてくださった細川先生に感謝する。

（キム　ヨンナム・修士課程 1 年）